

勝林寺寺報

親鸞の生涯 46

老いの親鸞



当時（鎌倉時代）、五十歳を超えて存命するひとは稀であったろう。親鸞はその時代に九十歳まで生存した。それだけでも驚異の人と言えよう。

その老いの晩年を先に述べたように彼は、宗教者・伝道者として数々の著作を著し業績を残した。しかしいまこの「親鸞の生涯」の稿を閉じるにあたって気になることは、その著作業績を生み出した「影の親鸞」である。

親鸞という人は終生、個人的なこと、日常生活での思いなどはいっさい語らなかつた人であった。周囲の人（妻の恵信尼の手紙とか弟子たちの文章のなか）から伺い知れるだけである。その隠された親鸞は。

先ず、帰京（62歳）後、どこに、だれと、暮らしていたのか。これも孫覚如の書いた『絵伝』に

聖人 故郷ニ帰リテ往事ヲ思ウニ、年々歳々夢ノゴトシ幻ノゴトシ。長安落陽（京都）ノスミカモ跡ヲドムルモ懶（もろ）シトテ、扶風（奈良）・扶翊（左京）トコロドコロニ移住シタマイキ。五条西洞院ワタリ、コレ一ツノ勝地ナリトテ、シバラク居ラ占メタモウ。

震災や火災、略奪などによって右往左往逃げ回ったすえ、三条富小路の実弟「尋有」の「善法坊」に移り住んだ。それは丁度「善鸞事件」の最中、建長七年（1255年）のことであったことまではわかる。そしてそのころ妻「恵信尼」は、長女「小黒の女房」を初め「信蓮房」「益方入道」「高野禪尼」

の四人の子女を伴って故郷の越後へ帰つた。恵信尼の父の土地財産があつたからといわれている。ではその後老いた親鸞は誰と暮らしていたのか。

末娘「覚信尼」と弟子の蓮位がいて世話を

していたようである。

長男「善鸞」は関東教化のため派遣されたが、親鸞八十四歳のとき勘當されて京都にその子息「如信」（当時二十一歳）が祖父親鸞のもとで勉学していたと考えられている。

年老いた「親鸞」。

耳も聞こえず目も見えなくなつてしまつたと消息のなかに歎く親鸞。そこへなおも関東や地方から法義についての問い合わせや質問・訴えがひつきりなくもたらされる。造悪無碍（この世この身のままのお救い）。弥勒菩薩と同等、現生正定聚。すでに救われている身だから、いかなる惡も權威も恐れなしと、その地の権力者につつかつて行く。当然その反対派は、やはり賢善精進、念佛も多く唱えてなど、各派各様の主張が対立するなかでますますそれら対立抗争は先鋭化して幕府からの彈圧・念佛禁制の口実を作り出していく。そういう状況が年を追うごとにますます苛烈になつて行つた。

親鸞はそれら門弟・門信徒からの訴えを「自身・我が身のこと」としてみずから悲嘆した。また「歎異」した。決して論難したり説諭したりしたのではない。そこに親鸞の真骨頂がある。

其だけではない。彼は当時の「世相」を、仏教伝統の歴史観である「正像末の歴史観」（釈迦死亡後、次第に真理は失われ、世界は混乱墮落していくという世界観）から今現実の世相を觀察するなかで、その「末法濁世」を生きている親鸞自身を觀察した『正像末淨土和讃』を作り、それにつけてもこの時代に生きる「濁惡の凡夫（親鸞）」を導くために「法然上人」として現れくださつた「智慧の「法然上人」として現れくださつた「智慧の

を懲悔する和讃』二十三首を作り、これらを法然様のご命日などに大勢の庶民男女といつしょに唱和したと想像される。とくにまたそに続いて『愚禿悲嘆述懐和讃十一首』をつくり、善鸞事件後を生きた親鸞の生きざまを伝えている。

晩年八十六歳の親鸞が、「法語」として書き残した「自然（じねん）法爾（ほうに）章」とよばれる文章を掲げておく。これが親鸞の九十年の生涯に至りとどいた境地であろうと思ふからである。（靈山勝海訳）

自然（じねん）と言うのは、自はおのずからという意味です。人の思慮分別によるものではありません。然と言うのは、そのようにさせることのないという言葉です。そのようにさせるには、人間の思慮分別によるものではありません。如来の本願によるものですから「法爾（ほうに）」と言ふのです。法爾と言うのは、この如来のお誓いです。法爾と言ふのは、この如来のお誓いです。法爾はこのにさせるのを法爾と言うのです。法爾はこの如来のお誓いです。法爾はこの思慮分別を加えることなくして、法の徳によつてそのようにさせられると言うのです。まったく人があらためて思慮分別する必要がないのです。だから、義のないのを本意とするにさせるのを法爾と言うのです。法爾はこの自然（じねん）と言うのは、元來そのようにさせるという言葉です。阿弥陀如来のお誓いは、もともと人の思慮分別を當てにされるものではなくて、口に南無阿弥陀仏と称えさせ、ここを如来に帰依させて、浄土へ迎えようとしてお考えくださつたのですから、善行を積んでとか、このような惡行の身ではとても往生はできないだろう、と心配しないのを「自然（じねん）」というのだと聞いています。

如来のお誓いの内容は、一切の生きとし生けるものを、無上の仏にならせよう、とお誓いくださつてゐるのです。無上の仏と生きる「濁惡の凡夫（親鸞）」を導くために「自然（じねん）」と言うのは、お姿がありません。お姿がおありでないから自然（じねん）と言うのです。お姿がおありになると示す時には、無上のさとりとは言いません。お姿もおありでないさまを知らせようとして、ことさらにおその「仏智を疑惑する罪惡深重のわたし

十月 神無月 のこよみ

| | |
|--------------------|------------------|
| 一日 検診（豊岡病院） | 二日 湯口 隆氏宅法事 |
| 三日 出石組『連研』（光顕寺） | 平田専福寺住職繼職法要（→二日） |
| 七日 朗読ボランティア（録音） | 検診（出石病院） |
| 八日 兵庫教区神戸別院大遠忌法事 | 沢田照夫氏宅七・十三回忌法事 |
| 九日 田中 重雄氏宅法事 | 出石秋まつり（→十日） |
| 十日 田中久子さま三回忌法事 | 田中久子さま三回忌法事 |
| 十一日 数森 好文さま忌明法事 | 十五日 敬老報恩講準備 |
| 十六日 稲木なつ・靖彦さま三回忌法事 | 別修敬老報恩講 |
| 十七日 湯口 久義さま一周忌法事 | 二〇日 読み聞かせボランティア |
| 二〇日 浜 薫・知広さま年回法事 | 二三日 西 宝示寺 山門落慶法事 |
| 二六日 みのりを聞く会 | 二六日 大遠忌法要（→二四日） |
| 二八日 あすなる（編集） | 二八日 中嶋 勉さま一周忌法事 |
| 三〇日 関川 忠司さま三回忌法事 | 三一日 関川 忠司さま三回忌法事 |



お月さま

如来さま



私、小学校三年生のときにひいおばあちゃんはそのときは亡くなりました。ひいおばあちゃんはそのとき八十九歳だったそうです。彼岸花が田園の畦に咲いて、お彼岸すきのころ、お家の庭に大きなテーブルを出してお月見のお飾りをしました。

華筒にススキが沢山挿してあって、お月見団子も大皿に一杯盛つてありました。我が家では毎年九月の満月の日は、一家みんなそろって庭に出てお月見をする習わしでした。

その時、きまつて、ひいおばあちゃんの言つたこと、私は五十年たつたいまでもハッキリ覚えているのは不思議です。

お月さまは今夜「名月の晩」だけやないんやで。わしら人間の目は「我が身勝手」な「ヨシの穴から天井のぞく」ちゅうて、あ、三日月さんや、今日は闇夜やいうてるけど、お月さまは人間がどのように見ようと、いつもどこでも居てくださるのや。一年中照らしていくくれるのや。ばあちゃん、お寺で聞いたんやけど「如来さま」もおんなじや。法然さまの歌に

ご遺言 報恩講のうた



和歌の浦和の 片男波の
寄せかけ寄せかけ 帰るがごとく
われ世に繁く 通いきたり
み仏の慈悲 伝えなまし

一人居てしまふ ゆびなば
二人と思え 二人にして
歎ぶおりは みたりなるぞ
その一人こそ 親鸞なれ

(私も一如来さまのお慈悲のなかにおさめられてい。だが悲しいことに私は自分本位の小さな目でしか見えない。如来さまを見ることができないでいる。しかし私に見えまることができる。)

お月さまは、一時も休みなく、いつもどこにいるものも、だれでも、照らしつづけていてくださる。)
私は、ひいおばあちゃんは、わが家の近くの淨土宗のお寺にお手伝いにズット出入りしていましたから、如来さまのことをよくわかっています。

あれから、五十年もたつて、なにもかも変わってしまった。わが家のお月見も、こ

こ何年かしておりませんが、わたしは九月半

ばの名月の夜には、ひとりお月さまを仰ぎ、

ひいおばあちゃんを思いだし、ひそかにお念仏

申すのです。

今年は九月二十三日、お彼岸の中日の夜が

満月です。

お月さまに手を合わせお念仏申しましょう

ところが最近、「勝林寺寺報」には、これが親鸞さまのご遺言として載っていません。なぜでしょうか。

お答えします。

親鸞さまは、「これは私の遺言」というものは残されなかつたと思います。

「勝林寺寺報」に紹介したのも、「遺言」であつて、ことに晩年、口癖のようになにか

につけておっしゃつていた言葉です。

「わたしが息たえたら、亡骸は、賀茂川に捨

てて魚に与えてくれればいい」

また

「わたしは加古川の教信さまをお手本にした

い。どろんこの暮らしなか、ただお念仏が

聞こて来さえすれば」

まだ

「わたしはお同行が、心の中で聞いた親鸞さまの

お心を歌に仕立てたものでしょ。

親鸞さま直接のことばではありませんが、

お同行のここに響いた親鸞様のお心です。

このおことばは、今は、淨土真宗のお聖教

の本には載つてはいてませんが、報恩講のう

たとして謡い次がれているのです。

最初の二番までうたつてみましょう。

子供会で覚えたあの歌は、親鸞様をおした

いしたお同行が、心の中で聞いた親鸞さまの

お心を歌に仕立てたものでしょ。

親鸞さま直接のことばではありませんが、

お同行のここに響いた親鸞様のお心です。

このおことばは、今は、淨土真宗のお聖教

の本には載つてはいてませんが、報恩講のう

たとして謡い次がれているのです。

ところが最近、ある植物学者の文章を読ん

で感銘させられた。

「春の七草」のようには一般的ではないに

わざわざされている。

ところが今年は、この七草に異変が起つ

ている。もうお彼岸も近いのに野にも山にも

田の畦にもこれらの花が咲き出さないのだ。

ところが最近、ある植物学者の文章を読ん

で感銘させられた。

「名もない雑草」ほど強いものはない。

どんな荒れ地であつても、人や獸に踏まれ

襲われる危険な土地であつても、かれらは其

れを最初から予測して、そういう条件に適応

する工夫と能力を最初から供えているのだそ

うだ。

どんなに苛酷な目にであつても、みてみな

さい必ずかれらは蘇ります。

人間にたしかに免疫力というものがある

てちょどやそつとでは挫けない抵抗力が備わ

ているとは言うものの、最近これが機能しな

い事態に遭遇することが多い。

第一、歳をとると、「死の恐怖」におびえ

てしまう。明日は死ぬのではないか。死んだらどうなるんだろう。そう思い始めると、な

にも手につかず生きているうちから生きる力

を失ってしまう。

しかし、考えてみると、学問もない無知蒙昧なもののほど、世界をつつむ大きなリズム。

法のはからいの中に、ちっぽけな計らいや、

浅はかなあせりを超えて、雑草のように生か

される世界があるのでないかと。

この気候異変のなかで、ことに名もない雑

草の生きざまに教えられたことでもあります。

なんでもこの歌は「開山さまの「ご遺言」を歌

にしたものだと聞きました。

万葉集第八卷に山上憶良の秋の花を詠める歌二首として先ず
秋の野に咲きたる花をお指折りかき数
すれば七種(ななき)の花
萩の花 尾花 萬花 撫子の花 女郎花また
そして次ぎに「秋の七草」を挙げる
萩の花 尾花 萬花 撫子の花 女郎花また
た藤袴 朝顔の花。

ところが最近、「勝林寺寺報」には、これが親鸞さまのご遺言として載っていません。なぜでしょうか。

お答えします。

親鸞さまは、「これは私の遺言」というものは残されなかつたと思います。

「勝林寺寺報」に紹介したのも、「遺言」であつて、ことに晩年、口癖のようになにか

につけておっしゃつていた言葉です。

「わたしは息たえたら、亡骸は、賀茂川に捨

てて魚に与えてくれればいい」

また

「わたしは加古川の教信さまをお手本にした

い。どろんこの暮らしなか、ただお念仏が

聞こて来さえすれば」

まだ

「わたしはお同行が、心の中で聞いた親鸞さまの

お心を歌に仕立てたものでしょ。

親鸞さま直接のことばではありませんが、

お同行のここに響いた親鸞様のお心です。

このおことばは、今は、淨土真宗のお聖教

の本には載つてはいてませんが、報恩講のう

たとして謡い次がれているのです。

最初の二番までうたつてみましょう。

子供会で覚えたあの歌は、親鸞様をおした

いしたお同行が、心の中で聞いた親鸞さまの

お心を歌に仕立てたものでしょ。

親鸞さま直接のことばではありませんが、

お同行のここに響いた親鸞様のお心です。

このおことばは、今は、淨土真宗のお聖教

の本には載つてはいてませんが、報恩講のう

たとして謡い次がれているのです。

ところが最近、ある植物学者の文章を読ん

で感銘させられた。

「名もない雑草」ほど強いものはない。

どんな荒れ地であつても、人や獸に踏まれ

襲われる危険な土地であつても、かれらは其

れを最初から予測して、そういう条件に適応

する工夫と能力を最初から供えているのだそ

うだ。

どんなに苛酷な目にであつても、みてみな

さい必ずかれらは蘇ります。

人間にたしかに免疫力というものがあつ

てちょどやそつとでは挫けない抵抗力が備わ

っているとは言うものの、最近これが機能しな

い事態に遭遇することが多い。

第一、歳をとると、「死の恐怖」におびえ

てしまう。明日は死ぬのではないか。死んだらどうなるんだろう。そう思い始めると、な

にも手につかず生きているうちから生きる力

を失ってしまう。

しかし、考えてみると、学問もない無知蒙昧なもののほど、世界をつつむ大きなリズム。

法のはからいの中に、ちっぽけな計らいや、

浅はかなあせりを超えて、雑草のように生か

される世界があるのでないかと。

この気候異変のなかで、ことに名もない雑

草の生きざまに教えられたことでもあります。

なんでもこの歌は「開山さまの「ご遺言」を歌

にしたものだと聞きました。

その子供会で覚えた歌。「報恩講のうた」。

わたしはなぜか三〇年もたつた今も、時折、

あの歌がつい口をついて出て来ます。そして、お

これが淨土真宗かと、歎ばせていただいてお

ります。

これで淨土真宗かと、歎ばせていただいてお

ります。

これが淨土真宗かと、歎ばせていただいてお

ります。

<p